



# ヤマアラシの のじれんま



kiki0218

どこにでもいる人、彼女はこれからいったいどこに出かけるのだろう。  
家に帰るとレトルトのカレーを食べながらテレビをみているのだろうか。  
それとも合コンにでも行って結婚相手でも探すのだろうか。

そんな事を想像しながら、彼女を見つめている。

彼女は、会社からでると、そそくさと街の雑踏に流れ込む。  
人々の蛇腹のような列に加わり急ぎ足で歩き出す。

## ある女

---

彼女は、突然立ち止まった。  
そこから石のように動けなくなったかの様だ。

それでも、人々の波は器用に彼女を避けて抜けていく。

おもいおもい体、沼地にめり込みそうな気分なのに足下はかたいコンクリート。  
普段気にもしないことが、今日はこんなにも違和感を覚える。

「あれ？  
楓じゃん、こんな路の往来で何してるの？」

この人どこかでみた事がある、あっ、何か答えなければ  
頭は焦るのに、答えがでてこない。

とりあえず、楓はこの人に話を合わせることにした。

「久しぶりー、げんきだった？」とかなんとかから始まり、  
数分、誰々が何の仕事をしているとか、誰と誰が結婚したとかを  
聞かされる羽目になる。

で、ようやく

「で、あんたはどうなの？」

「独身、彼氏なし、事務」

これが精一杯の私の回答。

「ははは、分かる、そんなオーラでてるもん、私もそう」

## ある女

---

どうやら、彼女も似たような境遇らしい。

そのまま、勢いで居酒屋に繰り出し、中ジョッキを2杯あげ、  
結婚したい、もっと楽しくお金が欲しいーだの普遍的なことを叫んだ気がする。

たった、これだけ。

石のようなあの状況を打破してくれた彼女には感謝する。

LINEを交換して別れた

しかし、最後まで言えなかった。

「あんた、だれ？」

でも、きっとこれからも連絡を取り合うんだろう。